

## 第二期国定修身教科書にみる伊勢神宮

Jason BARROWS

### 目次

はじめに

#### 第一章 修身教材「皇大神宮」の内容

##### 第一節 本文の内容

##### 第二節 挿図の内容

#### 第二章 明治天皇と伊勢神宮の関係

##### 第一節 神宮参拝

##### 第二節 参拝様式の変化

#### 第三章 明治期の伊勢神宮の状況

##### 境内構成・参拝者等について

##### 第一節 境内の改変 復興と新造

##### 第二節 参拝様式の変化

##### 第三節 参拝者数

##### 第四節 戦争と神宮

まとめ

### はじめに

伊勢神宮は皇大神宮（内宮）と豊受大神宮（外宮）の総称であり、正式名称は「神宮」である。その広大な敷地内にある殿舎等の諸施設とそこで行われる儀式は、長い時間を経て、神宮をとりまく情勢に影響されつつ、変化してきた。明治期には法的に最高位の位を与えられ、伊勢神宮を頂点としたヒエラルキーのもと、他の神社は統廃合され、合祀されてきた。

そのような中、義務教育の現場でも、伊勢

神宮が登場することとなる。「皇祖」、すなわち天皇の祖先神である天照大神を主祭神としている皇大神宮（内宮）が、1911（明治44）年以降使用の第二期国定修身教科書『尋常小学修身書』<sup>(1)</sup>の中に登場するのである。『日本書紀』神代の天孫降臨の一説から正当化された「国史」をもとに、第二期国定修身教科書は「皇祖」にあたる天照大神<sup>(2)</sup>を教え込むとともに、天照大神を祀る皇大神宮を取り上げた。その後、第四期国定修身教科書『尋常小学修身書』まで、皇大神宮は連続して取り上げられる。

そこで、本稿では、国定修身教科書に初登場し、その後の基軸を据えた第二期国定修身教科書の教材「皇大神宮」に関して内容分析を行い、その教材のもつ性格を考察することを目的とする。内容分析をするにあたり、まず、第二期国定修身教科書『尋常小学修身書』が何を教えようとしたのか、挿図が何を示しているのか、具体的に検討し、次に、その社会的背景として、第一に、明治期の伊勢神宮と天皇との関係の変化、第二に、明治期の伊勢神宮の状況を取り上げて見ていくことにする。

### 第一章 修身教材「皇大神宮」の内容

#### 第一節 本文の内容

まず、『尋常小学修身書』の第二～第四期<sup>(4)</sup>において、皇大神宮の記述の有無を確認する。

キーワード：修身、伊勢神宮、天照大神

表1 教材「皇大神宮」の一覧

| 期 | 巻 | 課   | 題 目       | 備 考   |
|---|---|-----|-----------|---|
| 二 | 二 | 十九  | クワウダイジングウ | 皇大神宮(板垣, 冠木鳥居, 石段等)南門前の図                              |
| 二 | 六 | 一   | 皇大神宮      | 図なし   |
| 三 | 三 | 十五  | クワウダイジングウ | 皇大神宮(板垣, 冠木鳥居, 石段等)南門前の図                              |
| 三 | 六 | 一   | 皇大神宮      | 1915年大正天皇即位礼の神宮親閲の図(五十鈴川に架かる宇治橋を渡り, 大鳥居をくぐる馬車・騎馬行列の図) |
| 四 | 三 | /   | /         | 皇大神宮(板垣, 冠木鳥居, 石段等)南門前の図を目次前に掲載。                      |
| 四 | 三 | 二十一 | 皇大神宮      | 五十鈴川に架かる宇治橋, 大鳥居の写真                                   |
| 四 | 六 | 一   | 皇大神宮      | 1928年昭和天皇即位礼の神宮親閲の図(参道を進む馬車一行の図)                      |

表1に明らかなように、皇大神宮は尋常小学通学中に2度登場し、皇大神宮南門前の図(板垣, 冠木鳥居, 石段等)は常に掲載される様式が確立していることがわかる。

また第二期(1910年~)が明治天皇, 第三期(1917年~)が大正天皇, 第四期が昭和天皇(1934年~)の三代の時期にわたっており, 第三及び第四期では各天皇即位礼に際して神宮へ親閲する図を掲載し, 本文においてもそれに言及する等, 各天皇と神宮の関係を強調させる構成となっている。

では, 以下, 第二期の皇大神宮の教材において何が教えられているのか, まずは本文を取り上げて検討していく。

まず, 巻二「クワウダイジングウ」の児童用書の本文は次の通りである。

クワウダイジングウ ハ テンノウヘイ  
カ ノ ゴセンゾヲ オマツリ マウシ  
テアル オミヤ デ ゴザイマス。ワレ  
ワレ 日本人 ハ コノ オミヤ ヲ  
ウヤマワナケレバナリマセン

皇大神宮への崇拜を促す文であるが, 崇拜する理由は“天皇の祖先神(教育勅語中の「皇祖皇宗」の「皇祖」)を祀る神社”だから, ただそれだけである。その理由だけで, 皇大

神宮には超越性と絶対性があることを示している。この理由は天皇への絶対服従を前提として天皇への崇拜から「皇祖」への崇拜を連結させるとともに, 天皇への服従をさらに一層強化させている。

巻六「皇大神宮」の児童用書の本文は, さらに皇室が皇大神宮をいかに崇敬して, 重く扱っているのかを具体的に示し, 「我々臣民たる者は常に皇大神宮を尊崇し, 天壤無窮の皇運を扶翼し奉らんと心掛くべきなり」と教育勅語の一文で結んでいる。皇大神宮の超越性を皇室の行為によって意味づけし, 再び天皇への服従を深化させている。皇室の行為の一例として本文には, 「皇室及び国家に大事ある時は天皇陛下之を皇大神宮に御親告あらせ給ひ」と記述があり, 戦争奉告の勅使派遣の他に, 特に日露戦争後の1905(明治38)年に行われた日露「平和克復」の「奉告」を指していることがうかがえる。戦争という軍事情為に, 天皇自身が神宮へ戦勝祈願する, 神宮とはそれほど依拠されている存在であることが読みとれる。

## 第二節 挿図の内容

では, 次に巻二の図, つまり第四期まで同じ構図の皇大神宮南門前の図(板垣, 冠木鳥居, 石段等)が何を示しているのか, 具体的に検討していく。皇大神宮南門前の図を図1に掲げた。

国定修身教科書に見られる図に描かれたのは皇大神宮の「板垣南御門」(板垣南門)にある「冠木鳥居」<sup>(5)</sup>である。板垣には南北東西に四つの門が配されおり, 特に南門は「冠木鳥居」と呼ばれている。この独特の形式をもつ鳥居のずっと奥に, 皇大神宮の正殿がある。正殿へ向かうには, 宇治橋を渡り, 一ノ鳥居, 二ノ鳥居をくぐり, 石段をのぼり, 「板垣南御門」, 「外玉垣南御門」を進んでいく。皇大神宮は四重に垣がめぐらされており, それらは外から板垣, 二重の玉垣, 瑞垣と呼ばれて



図1 第二期国定修身教科書の巻二、十九の図  
(『日本教科書大系』近代編修身(三), p.73.)

<sup>(6)</sup>。そのため、「冠木鳥居」が描かれていても、正殿自体は遠く、その全体像を図からは判別することは不可能である。どんな殿舎なのか、「冠木鳥居」の向こう側はどのようなになっているのか、皆目不明な図である。

さらに、この「冠木鳥居」に向かって、石段が配されていることが図に描かれている。第一回目の明治天皇による参拝では、この前で明治天皇は乗物から下車して草履を履き、正殿へ向かって歩いた。それから「板垣南御門」をくぐり、その次にある「外玉垣南御門」からはさらに沓を履いて進んだという。<sup>(7)</sup>第三回目および第四回目の参拝でも、「板垣南御門」前にて馬車を降り、徒歩で進んでいる。<sup>(8)</sup>「板垣南御門」の「冠木鳥居」、「冠木鳥居」へとつながる石段は、皇大神宮の超越性・神聖性を強める装置として働いている。そして、「外玉垣南御門」に垂れ下がる白絹の「御幌(みとぼり)」により、玉垣奥の様子は一切うかがうことはできない。それら神聖性を強める装置から正殿に接近する過程で、厳かに行われる天皇による一連の行為は、皇大神宮の神聖性をさらにより一層深める行為であるといえる。

さらに、「外玉垣南御門」の内側へは天皇が徒歩で進むことが可能であっても、一般の国民は進むことができない地であった。正殿

の全体像を直に見ることは、一般の国民にとっては不可能であり、皇大神宮を心象に浮かべるために「板垣南御門」の「冠木鳥居」、石段、白絹等が記憶装置として国定修身教科書の中に描かれているといえる。

## 第二章 明治天皇と伊勢神宮の関係

### 第一節 神宮参拝

明治以前、天皇が伊勢神宮に参拝したという記録はないという。<sup>(9)</sup>明治天皇以前の歴代天皇は、神嘗祭の際に奉幣使を伊勢神宮に派遣するが、天皇自身は参拝しておらず、皇居等で遙拝を行うのみに止まっていた。<sup>(10)</sup>また、明治天皇の父孝明天皇が1863(文久3)年8月に伊勢神宮への参拝を実施しようとしたが、政変により中止となっていた。<sup>(11)</sup>

1869(明治2)年4月23日(陰暦では3月12日)、明治天皇は東京へ向かう途中で、伊勢神宮に参拝した。<sup>(12)</sup>時はまだ榎本武揚等の旧幕府軍が箱館五稜郭に立てこもって官軍に抗しており、東京遷都の通達から一カ月も経っていない、明治天皇18歳の時の出来事であった。

明治天皇はその生涯で4度も参拝を行った。1869(明治2)年の後は、1872(明治5)年、1880(明治13)年、1905(明治38)年に参拝が実施された。<sup>(13)</sup>「皇祖」(皇室の祖先神)である天照大神へ、そして天照大神を主祭神として祀る伊勢神宮へ、天皇自身が直接赴いて崇拝するという行為により、天照大神 伊勢神宮 天皇という連繋が明確に外へ示された。『神宮・明治百年史』は、明治天皇による神宮参拝を「神宮史上未曾有の天皇御親拝」、「明治天皇の皇祖御崇敬の御叡慮いかばかり篤かつたかを示すかしこき御事」と位置づけている。<sup>(14)</sup>

### 第二節 参拝様式の変化

各年代により天皇の神宮参拝の様式は変化している。それは、天皇を取り巻く社会情勢

の変化へあわせて様式が変えられたものと考えられる。

「王政復古」奉告をした第一回目の明治天皇による神宮参拝の際には、明治天皇の服装は束帯であった。関西巡幸途中に行われた第二回目参拝でも束帯姿であった。しかし、京都・三重等巡幸途中に行われた第三回目参拝では大礼服に変わり、日露戦争平和克復奉告のために行われた第四回参拝では大元帥の姿であった。

とくに、第四回目参拝の規模は大きく、内務大臣、宮内大臣等の閣僚、さらに内閣総理大臣(桂太郎)をも同伴させていた。雨天に備えて、フロックコートや手傘の手配、「雨儀廊下」の設置など、神宮側の迎送体制も細かく整えられていった。さらに、この時は、「おんみづから皇祖の御前に御告文をのらせたまふことこれが初め」と強調されるように、天皇自身により告文が初めて奏上され、陸海軍儀仗兵が一斉に捧銃喇叭を奏し、天皇による神宮参拝の意味と様式が大きく変化したことがわかる。

### 第三章 明治期の伊勢神宮の状況 一境内構成・参拝者等について一

#### 第一節 境内の改変―復興と新造―

1869(明治2)年、伊勢神宮の内宮(皇大神宮)の正遷宮では、外玉垣、板垣、板垣御門の蕃塀が復興し、東宮地に造営された。西宮地としては、1889(明治22)年の正遷宮に外玉垣、板垣が復興している。

復興された板垣は、丸柱の間に羽目板を入れた高さ1丈(1丈=10尺。約3メートル)の垣であった。それ以前の板垣は、高さが5尺ほど、1869(明治2)年に復興された板垣の半分の高さしかなく、外から内部を伺えるものであった。

このように、1868年時点では瑞垣、玉垣に二重であったものが、明治期に入った第一回

の正遷宮により、四重に配された上に外側の板垣を高くしたことから、正殿への距離は増大して遠のき、外からの視線は垣根により遮られ、正殿を隠してしまった。

また、1869(明治2)年、西宮地の西南部の急勾配の地形を整備し、古代からの自然地形が一変している。1889(明治22)年には、防災上・景観上の理由から、火除橋までの人家を撤去して公園に作り替えている。

さらに、内宮への入り口にあたり、五十鈴川に架けられた宇治橋は、洪水や焼失により再架橋がされていたが、1889(明治22)年正遷宮以後、式年造営に伴って新造されるようになった。

#### 第二節 参拝様式の変化

伊勢神宮は7世紀末、持統天皇期より式年造営が実施されてきたという。殿舎を定期的に新しく造営し、旧殿舎から新殿舎へと御神体を遷す儀式である。明治期に入り、皇大神宮の正遷宮は、1869(明治2)年、1889(明治22)年、1909(明治42)年に20年ごと持続的に実施された。

しかし、これら正遷宮が行われる一方で、殿舎修理等のために仮殿に御神体を遷し、その間に修理を行い、再びもとに戻すという仮殿遷宮を行っている。

まず、1900(明治33)年5月、参集所灰置場から出火した火災により、行在所・正殿(西宮地)等が焼失したため、急遽、翌月に仮殿遷宮が行われている。この時、灰置場の火は正殿の屋根に及んで炎上した。その後、再び西宮地に正殿を造営し、翌年10月には臨時遷宮が行われた。また、1901(明治34)年9月には東宝殿で雨漏りが原因により仮殿遷宮が行われている。

神宮における修理はこれだけに止まらなかった。例えば、1869(明治2)年には暴風雨被害により宇治橋等破損、1870(明治3)年には台風により殿舎破損、1885(明治18)年に

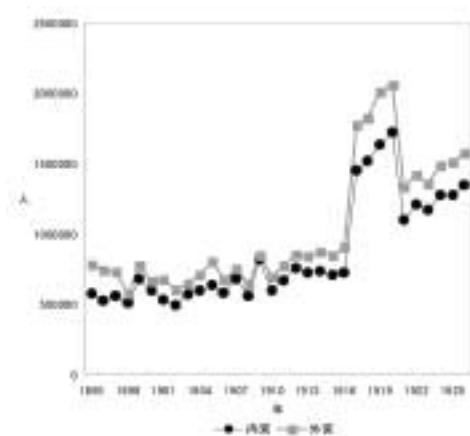
は暴風雨により参集所・車寄等破損，1887（明治20）年には暴風雨により宇治橋大破，1888（明治21）年暴風雨により瑞垣・玉垣が破損，1896（明治29）年暴風雨により境内立木が50数本倒木，1908（明治40）年暴風雨により殿舎破損等がある<sup>89</sup>。

このように、神宮は殿舎・橋・樹木風景を修理・造営しながら、神宮としての存在を維持してきた。神宮の神聖性を醸し出すために、これらの施設・風景は不可欠な装置であったことがわかる。

### 第三節 参拝者数

古来、神宮では天皇以外に個人が幣帛を奉って祈禱を行うことは禁止されてきた。しかし、御師の広域にわたる活動もあり、伊勢神宮（内宮・外宮）への参拝は少なくなく、特に幕末に爆発的な増加もあった。明治期に入り、御師が廃止された後も、伊勢神宮への参拝は増加していた（表2参照）。しかし、内宮と外宮を比較すると、明らかに外宮への参拝者が多く、天照大神を祀る内宮への参拝者数は少ない。参拝者の数が逆転するのは1949年まで待たなければならなかった。

表2 神宮参拝者数（1895-1926年）



注) 神宮司庁編『神宮・明治百年史』上巻，pp.414-415掲載統計より作成。

### 第四節 戦争と神宮

1894（明治27）年8月11日、「日清開戦奉告祭」が内宮・外宮で行われている。日清戦争中には、「神宮警備兵駐在ノ旨」が宮内庁から通達された。戦後には「日清戦役平和克復奉告祭」が両宮で行われ、日清戦利品の献納を受けることになる<sup>90</sup>。

日露戦争においては、まず戦争前に第三師団より歩兵一個中隊が神宮警護のために派遣された。日清戦争時と同様に「宣戦奉告祭」が実施された<sup>91</sup>。その後、さらに、神宮では軍事的な風景が見られることになる。

まず、1905（明治38）年10月、連合艦隊司令長官の東郷平八郎一行が凱旋奉告のため参拝し、同月東郷平八郎より戦利品の献納が願い出され、11月には「平和克復」につき明治天皇自身が報告に訪れる参拝があった。これ以降、全国の神社に軍事品が献納され、陳列されることが浸透したという<sup>92</sup>。

このように、戦利祈願・成就と神宮は結びつき、神宮の位置づけはより一層軍事的なものとなっていた。

### まとめ

明治期の伊勢神宮の実体から、第二期国定修身教科書の中の神宮の実体に接近してきた。明治以後の伊勢神宮と天皇との関係の変化では、天皇による神宮参拝の開始、天皇自身による初の戦勝報告など、神宮と天皇の密接な結びつきを全面に押し出す方向が見られるようになっていた。

さらに、神宮は、日清・日露戦争後、戦争と結びつく事項が付属させられていった。とくに、大元帥服着用の上皇自身による日露戦後の直接報告、戦利品の奉納等、大元帥戦争神宮への結びつきが着々と強められていった。

その一方で、度重なる殿舎破損等により、神宮を維持する努力も必要であり、また、内

宮が外宮よりも参拝者が少なく、内宮への崇拜を一層促す必要もあった。

以上のように、天皇の皇祖神である天照大神を祭祀する伊勢神宮（内宮）に神秘性を与えるために、明治期、政府・皇室は様々な工夫を模索してきた。第二期国定修身教科書の教材「皇大神宮」は、まさに神宮の神秘性・超越性・軍事性を打ち出す性格をもった内容構成であった。

日露戦争後、第二期国定修身教科書が編纂・使用開始される時には、神宮の神秘性・超越性・軍事性を義務教育の場で普及させる情勢・体制になっていたことが、第二期国定修身教科書以降、不変な構図で使用され続ける皇大神宮の図、すなわち、「冠木鳥居」と石段の図に象徴されているのである。

〔注〕

- (1) 1903（明治36）年4月、小学校令が改正され、国定教科書制度が定められた。それまで検定教科書が使用されてきた「修身」は、国語、地理等とともに、必ず国定教科書を使用するよう決定された。貴族院および衆議院においては、尋常小学校修身教科書を国定化する建議書がすでに1896～1900年に採択され、1900年には文部省修身教科書調査委員会が設置され、1903年の教科書国定化を経て、1904年以降国定修身教科書が使用されることとなる。この第一期国定修身教科書は使用されるや否や各方面から批判をあび、1907（明治40）年義務教育の2年延長を経て、1911（明治44）年までに修正が加えられ、第二期国定修身教科書『尋常小学修身書』（巻一～巻六）が使用開始される。第一期国定修身教科書への批判、修正をめぐる論説は三井須美子「家族国家観による『国民道徳』の形成過程（その2）」（『都留文科大学研究紀要』第33集、1990年）に詳しい。
- (2) 天孫降臨を指示した神については、『日本書紀』神代内でも、『古事記』でも複数の記述がある。『日本書紀』神代においては、天照大神によるとするもの、高皇産靈尊（たかみむすびのみこと）によるとするもの、また『古事記』では天照大神と高木神（たかぎのかみ）とするものが記されている。天孫降臨を命じたのを天照大神とすることに、「教科書の記述は操作されている」と千田稔は述べている（『高千穂幻想』PHP新書、1999年、p.24）。
- (3) 管見のかぎり、国定修身教科書の記述内容についての考察では、「家族像」や「女性像」といった理想像を分析した論文が多く、その他には公民的教材の検討を扱った土屋直人「明治末期における小学校国民的教材『外交』『国交』の検討」（『早稲田大学大学院教育学研究科紀要』第10号、2000年）がある。
- (4) 本稿で使用した『尋常小学修身書』は『日本教科書大系：近代編修身（三）』講談社、1962年掲載のものである。表1の教科書の出版年は、第二期巻二は1910年、同巻六は1911年、第三期巻三は1919年、同巻六は1922年、第四期巻三は1936年、同巻六は1939年である。
- (5) 建築形式としては、神明鳥居の笠木の下に冠木をいれた独特の形式であり、現在でもこの形式は続けられて守られているという（稲垣榮三「伊勢神宮の建築とその象徴体系」『伊勢神宮』岩波書店、1995年、p.240）。
- (6) 國學院大學日本文化研究所編『神道事典』弘文堂、1999年、p.184。
- (7) 神宮司庁編『神宮・明治百年史』上巻、1968年、p.27。
- (8) 神宮司庁編『神宮・明治百年史』上巻、1968年、p.46、50。なお、第二回目の参拝は乗馬予定を中止したため、乗物を降りる行為はない（神宮司庁編『神宮・明治百年史』上巻、1968年、p.39）。
- (9) 藤谷俊雄・直木孝次『伊勢神宮』三一新書、1960年、p.161。
- (10) 村上重良『日本史の中の天皇』2003年、講談社、p.170。

第二期国定修身教科書にみる伊勢神宮

- (11) 神宮司庁編『神宮・明治百年史』上巻, 1968年, p.7.
- (12) 神宮司庁編『神宮・明治百年史』上巻, 1968年, pp.7-8, 28-34.
- (13) 神宮司庁編『神宮・明治百年史』上巻, 1968年, pp.7-8, 28-53.
- (14) 神宮司庁編『神宮・明治百年史』上巻, 1968年, p.27.
- (15) 八束清貴『皇室と神宮』神宮司庁教導部, 1957年, pp.129-130. 神宮司庁編『神宮・明治百年史』上巻, 1968年を参照。
- (16) 神宮司庁編『神宮・明治百年史』上巻, 1968年, p.52.
- (17) 神宮司庁編『神宮・明治百年史』上巻, 1968年, p.51.
- (18) 神宮司庁編『神宮・明治百年史』上巻, 1968年, p.50.
- (19) 蕃塙 [ばんぺい] は, 伊勢神宮の内宮・外宮のみに見られる塙である。屋根付きの衝立状の塙で, 目隠しの用途で配されたという (前久夫『寺社建築の歴史図典』東京美術, 2002年, p.270)。
- (20) 福山敏男『神社建築の研究』中央公論美術出版, p.105.
- (21) 福山敏男『神社建築の研究』中央公論美術出版, p.113.
- (22) 四重に復興された垣について「それぞれの垣に付属する門が参拝者の身分によって順々に開かれるという階層構成の権威づけに意味づけられているが, それも“隠す”ことのヒエラルキーだと読んでいい」と, 磯崎新は指摘している(「イセ 始源のもどき」『伊勢神宮』岩波書店, 1995年, p.23)。
- (23) 福山敏男『神社建築の研究』中央公論美術出版, pp.113-114.
- (24) 新田均「明治時代の伊勢神宮」『皇學館論叢』第27巻第2号, 1994年, p.74.
- (25) 福山敏男『神社建築の研究』中央公論美術出版, pp.114-115.
- (26) 福山敏男『神社建築の研究』中央公論美術出版, 1984年, p.99.
- (27) 『伊勢神宮』岩波書店, 1995年, p.256.
- (28) 神宮司庁編『神宮・明治百年史』補遺, 1971年, pp.6-39.
- (29) 神宮司庁編『神宮・明治百年史』補遺, 1971年, pp.30-31.
- (30) 神宮司庁編『神宮・明治百年史』補遺, 1971年, p.36.
- (31) 神宮司庁編『神宮・明治百年史』補遺, 1971年, p.37.
- (32) 藤谷俊雄・直木孝次『伊勢神宮』三一新書, 1960年, p.190.
- (33) 「つねに何か隠されている感じを感じることを, さらには現地を訪れてみると物理的に遮蔽されて直視できないだけでなく, ごくわずかしかとりつけられていない象徴的にイメージを喚起する飾金物のたぐいの由来を説明もできず, むしろ, それを“隠された者”として完治させるところにイセの誘惑の根元をみることができる」と磯崎新は建築学的考察から指摘している(磯崎新「イセ 始源のもどき」『伊勢神宮』岩波書店, 1995年, p.19)。

[Abstract]

## The Role of Ise Jingu Shrine According to the *National Morals Textbook* During the Late Meiji Period

Jason BARROWS

Ise Jingu Shrine is actually composed of two Shrines. The Naiku, the main shrine, is where the Imperial Kami ancestor, Amaterasu Omikami, is worshipped. The Geku is where the Kami of agriculture and industry, Toyouke Omikami, is worshiped. While the rites at the Geku are conducted in the exact same fashion as the Naiku, it is interesting to know that only the Naiku Shrine is mentioned in the *National Morals Textbook*. The *National Morals Textbook* addresses the relationship between the Imperial Kami ancestor, Amaterasu Omikami, and the Naiku Shrines, and how the Naiku Shrines are connected to Japan as a nation. This paper will analyze the change in the relations between Ise Jingu Shrine and the Emperor toward the end of the Meiji period.

---

Key words : National Morals Textbook, Ise Jingu, Amaterasu Omikami